

博士論文(要約)

19 世紀米国の教師教育における女性教師のジレンマ
—教職の女性化と専門職化の史的展開—

佐久間亜紀

博士号取得日から5年以内に、全文を刊行する予定である。以下は全体の内容を要約したものである。

我が国において、米国の教師教育史を対象にする研究は、三好信浩『教師教育の成立と発展』(1972)など少数にとどまり、さらに1980年代以降はほとんど空白の状態が続いてきた。したがって、現代米国の教師教育における諸問題を理解するためにも、史的知見の整理が必要とされていた。米国においても、教師教育史研究は活発に展開されてきたとは言いがたいが、1980年代後半にユルゲン・ヘルプストが『そして悲しそうに教える—米国文化における教師教育と専門職化』(Jurgen Herbst, 1989)で教師教育の発展史観の修正を促して以降、クリスティーン・オグレン『米国州立師範学校』(Christine A. Ogren, 2005)など、史的再検討の試みが続けられてきた。オグレンは、学生の大半を占めていた女性の視点もとりいれて州立師範学校史を再検討したが、州立師範学校で教壇にたった女性については未検討に留まっていた。

したがって本研究では、19世紀米国において教師教育に携わった女性7名の思想と実践の分析をとおして、19世紀米国における教職の女性化と専門職化の史的展開を明らかにすることを主題とした。研究方法としては、当時を生きた女性の生々しい経験に迫るために、女性史研究で近年あらためて再評価されてきた個人史研究を採用し、個人史の積み重ねによる分析をおこなった。そのうえで、事例数の少なさを補うために各期の冒頭で当時の問題状況を俯瞰し、各事例の特徴や位置づけを明示する構成とした。

本論は3部10章から構成した。

第1部では、19世紀初頭に女子セミナーを設立した3名の女性が、教師教育において担った役割とその教師像を検討した。

第1章では、19世紀初頭までの教職の状況と、男性指導者らが展開していた教職を専門職化しようとする言説を検討した。男性指導者らは、教職は男性が生涯を賭すに値する専門職であると唱道していたが、当時の教職の主眼は学校秩序の維持にあり知的職業とは考えられていなかったうえ、実態としても低待遇で男性の生業とはなりえなかった。この実態が女性教師の増加や、女性教師像の社会的受容を下支えしていた。

一方、女性こそが教職にふさわしいとする教師像を唱道する教育者たちが出現していた。そこで第2章で1821年にトロイ女性セミナーを設立したエマ・ウィラード(Emma Hart Willard, 1787-1870)を、第3章で1823年にハートフォード女性セミナーを設立したキャサリン・ビーチャー(Catharine Esther Beecher, 1800-1878)を、第4章で1837年にマウント・ホリヨーク女性セミナーを設立したメアリー・ライアン(Mary Mason Lyon, 1797-1849)を取り上げ、その教師像と教師教育の実際を明らかにした。

彼女たちは、女性ゆえに教育機関から疎外され独学で育った経験から、女性の教育機会拡大を目的としつつ、女性教師とその養成の重要性を主張していた。彼女らの活動は、第二次信仰復興運動を背景にした「共和国の母」としての女性像によって容認されていたが、彼女たちは自分の言説と実際の自己像との間にジレンマを抱え、このジレンマが各教師像に反映されていた。すでに母となっていたウィラードは、共和国の母としての教師像を描いたが、婚約者に先立たれて一度は絶望の淵に立ったビーチャーは、女性が一人でも経済

的に自立しうる専門職としての教師像を構想した。他方、信仰に生き生涯独身を貫いたライアンは、自己のすべてを犠牲にして神に仕える聖職者としての教師像を唱道し、ビーチャーの専門職としての教師像を批判していた。

彼女たちの教師像は、女性の教職への参入を可能にしたが、同時に女性と教職を深く結びつける結果をもたらした。また意図せざる結果として、彼女たちの言説が教職の偏った性比や低賃金、昇進機会の男女差や厳しい労働実態を正当化する素地を形成していった。

第 2 部では、19 世紀中葉に州立師範学校で教鞭をとったイレクタ・ウォルトン(Electa Lincoln Walton, 1824-1908)が担った役割とその教師像を中心に検討し、州立師範学校が、女性の教育機関および女性の就業先として重要な意義をもっていたことを明らかにした。

まず第 5 章において、州立師範学校が女性教育機関として成立した過程を明らかにした。州立師範学校は、設立時にはすでに教職の女性化が進行していたため、女性職としての社会的イメージや社会的地位の低さと密接に関連づけられる宿命を負っていた。設立目的である教職の専門職化の実現は、当初から大きな困難に直面していた。

第 6 章では、ウェスト・ニュートン州立師範学校で校長補助教師を務めていたウォルトンが、校長の病気休養中に校長代理として創立記念式典を挙げるなど、学校運営に重要な役割を果たしていたことを明らかにした。ウォルトンは、神と男性校長に献身する女性教師像を体現して学生に影響力をもちえていたが、皮肉にもその教師像によって自分の業績を補助的位置に留めることに荷担するジレンマに直面していた。ウォルトンは次期校長に推薦されたが、州教育委員会には女性であるために承認されず、結婚退職していた。またその後夫と共著で師範教育の教科書を執筆したが、女性であるためにその著書の多くは夫の単著として出版され、ウォルトンの名は序に記されるのみだった。彼女の業績は生涯を通じてシャドー・ワークに留められていたが、しかし次世代の女性が管理職につくための実績は作られていた。

第 7 章では、19 世紀半ばの東部諸州における女性教師の手紙や日記の検討を通して、当時の一般的な女性教師の心性や生活の実態を明らかにした。また初期州立師範学校の教育現場への影響は限定的だったことを示した。

第 3 部では、南北戦争後の州立師範学校発展期に教鞭をとった 3 名の女性の思想と実践を明らかにした。

まず第 8 章で、当時州立師範学校が直面した問題を整理した。州立師範学校は南北戦争後に、地理的にも中西部や南部にも普及するとともに、産業構造の転換や都市文化の出現によって量的にも急速に拡大していった。同時に、中等教育の急激な拡大に伴い、従来男性職とされてきた高校教師の需要増加や、高等教育機関の多様化や序列化への対応に迫られていた

第 9 章では、マサチューセッツ州立師範学校フラミンガム校において全米初の女性校長となったアニー・ジョンソン(Annie Johnson, ?-1894)と、その後継エレン・ハイド(Ellen Hyde, 1838-1926、在任期間 1875-1898)の思想と実践を明らかにした。

第 10 章では、ミシガン州立師範学校においてプリセプトレス(校長に次ぐ要職)および歴史市民学部長を務めたジュリア・キング(Julia Anna King, 1838-1919)の思想と実践を明

らかにした。

この3名は女性でありながら校長など管理職に就任していた。19世紀後半の州立師範学校では女性管理職が誕生していたのであり、州立師範学校が女性に開かれた教育機関となっていた事実を端的に示している。彼女たちは、教室教師としての経験に根ざした教育学を探究すると共に、教養教育と教職教育の双方を重視する知性的な教師教育カリキュラムを創造していた。教師の学問的水準を向上する試みは州立師範学校の大学化によって達成されたが、教室教師としての経験をもつ女性ファカルティはポストを失い、総合大学化の過程で肝心の教師教育事業は重視されなくなっていった。また中等教育教師の需要増加に対応する過程で、男性の多い校長職や教育行政職の専門職化は一部達成されたが、女性が多くを占める教室教師の専門職化は置き去りにされた。すなわち、女性化した教職の現状は変革されないまま、教師養成機関の脱女性化（養成すべき教師像の脱女性化、学生の脱女性化、大学教師の脱女性化、教師教育内容の脱女性化）が進展したのだった。

結論および今後の研究課題は、以下四点に整理された。

第一に、19世紀米国の教師教育においては、州立師範学校設立前から女性が重要な役割を果たしていたことを明らかにした。また州立師範学校では多くの女性がジレンマに直面しつつも教鞭をとり、管理職にまで就任していた。本研究では米国においてさえ未開拓だった女性教師3名の史料を明らかにした。さらなる事例の発掘が課題である。

第二に、州立師範学校は、その設立前から教職の女性化が進行していたため、教職を専門職化しようとする試みは女性の教育水準や女性教師の待遇と密接に関連づけられていた。州立師範学校は、教育水準を上げるために男子志望者を獲得しなければならないが、男子学生は教職準備教育より進学準備教育を求めるというジレンマに直面したのであった。結果として、中西部の州立師範学校の多くは脱女性化を図って大学昇格化を果たしたが、教師教育は周知的業務に追いやられた。小学校教師養成という使命を重視した東部の州立師範学校は、結果として大学昇格化が遅れ高等教育機関としての威信も獲得できなかった。この史的展開をみれば、教師の力量の向上は、教師養成機関のカリキュラム改革や高度化によってのみ達成しうるものでなく、教職の待遇や社会的地位への対処も重要であることが示唆される。20世紀以降に、教職の力量を向上させようとする改革と、教職の社会的地位を向上させようとする改革が史的にどう展開したかの探究が、喫緊の課題である。

第三に、米国において教職の専門職化や教員養成機関の高度化には、ジェンダーの問題が密接に関与してきたことが明らかになった。また教職の専門職化を目指す場合は、その専門職像が内包する社会規範を検討する必要が提起された。

第四に、従来の教師教育カリキュラム史研究は男性教育者の思想のみを対象にしてきたが、看過されてきた女性教師の思想や実践も重要であることが明らかになった。女性教師の視点も含めて米国教師養成カリキュラム理念をさらに再検討し、教養教育と教職教育の関係がどのように捉えられて展開してきたのかを一層解明することが、今後の重要な課題である。